

私の英語人生

——3度のターニング・ポイント



柏野健次

私たちの時代の英語教育は中学校から始まった。小学生の頃から言葉に興味のあった私は、英語に容易に溶け込むことができた。1年生の教科書は *Jack and Betty* で、まだイギリス英語が中心だった。3年間で習った先生の中では、I先生の授業が印象に残っている。厳しいが、大変熱心な先生だった。高校に入学すると、学習する単語の数が急に増え、初めて英和辞典を買った。三省堂の『クラウン英和辞典』である。高校では、T先生とK先生が懐かしく思い出される。2人からは積極性と英語のものの考え方を学んだ。高校の3年間で、英語の授業が待ち遠しいと思うほど、私は英語が好きになっていった。

大学進学時には、文学ではなく英語そのものを勉強したかったので、外国語大学を選んだ。当時は「英語学」という分野があるのをまだ知らなかった。

神戸市外国語大学（外国語学部 英米学科）に入学し、1年生の時に小西友七先生の文法の授業を受けたが、受験英語の知識を根底から覆される思いがした。

2年生の終わりにゼミ選択の時期になった時、私は英語学のO先生のゼミを希望した。小西先生のゼミは厳しいと聞いていたので、恐れをなして敬遠したのである。ところが、ある日、O先生から自宅に電話があり、「急に他大学に転出することになったので君のことは小西先生に頼んでおいた」と言われた。これが第1のターニング・ポイントである。

4年生になり、卒業後は高校の英語教師になるつもりだったので、その年の6月に教育実習に出かけた。ところが、実習が始まった3日目に倒れてしまい、入院を余儀なくされた。2週間後には退院できたが、教員免許は取れなくなってしまった。そこで、研究者に

なるためではなく、教員免許取得のために神戸外大大学院に進学した。これが第2のターニング・ポイントである。

大学院入学当時は変形生成文法の最盛期だったが、私はどうしても馴染めず、それを避けるようにソシュールの『一般言語学講義』や三浦つとむの『日本語はどのような言語か』などの言語論の本を読んでいった。

そして、時が経ち大学院修了式の日となった。式の後、修了生の何人かが小西先生の自宅に集められ、その席で後に『英語基本動詞辞典』（研究社）となる辞典の構想が初めて明かされた。私たちは協力を要請され、全員がこれを引き受けた。

当時の私は文法指向で、英語の実態には無関心であった。事実、アスペクトに関する修士論文には実例は1例も出てこない。しかし、辞典作成の必要上、ペーパーバックを読み始めて学校英語と実際の英語との間にあるギャップに初めて気づいた。これがきっかけとなり、私の興味は文法から語法へと移行していくことになる。これが第3のターニング・ポイントである。

この辞典は、5年で完成し、その後、『英語基本形容詞・副詞辞典』『英語基本名詞辞典』（ともに研究社）、『現代英語語法辞典』（三省堂）と延べ30年に渡って私は小西先生の下で辞典作りに没頭することになる。

この仕事を通じて私の語法観が確立し、そのお蔭で単独の著書を何冊か上梓することができた。ここ10年に限ると、『英語語法レファレンス』『英語語法詳解』（ともに三省堂）、『英語語法ライブラリ』（開拓社）が世に出た。現在も、大修館書店の英和辞典や総合英語を語法面からサポートする仕事が継続中である。

（かしの けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授）